
わすれもの

emanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わすれもの

【ZPDF】

Z0217K

【作者名】

emanon

【あらすじ】

「わたし」が帰郷したのは久しぶりのことだった。

電車に揺られながら、窓の外をみると、昔通つた高校が見える。
懐かしさにかられ、「わたし」は気が付くと電車を降りていた。

電車が揺れる。

高校のとき、通学のために毎日乗った路線だ、もう少しあれば通つた高校が、さらにいけば、実家が見える。景色はそのころと大して変わつておらず、開発が進んだ形跡もない。

わたしは、ぼんやりと車窓から外を眺めている。

瓦屋根が太陽を反射し、ギラギラと光る。外は汗が吹き出るような暑さだろう。それに比べ、車内は冷房が効いていて快適そのものだ。

築50年くらいの中途半端に古い家屋がポツポツと立ち並ぶ。人がごつた返すような都会でもなく、かといって自然溢れる田舎でもない。それがわたしの故郷。

「変わつてないなあ」

ふと、つぶやいた。一人でぐらしはじめてから本当に独り言が増えた。

いつぶりだろうか。成人式以来だから、前の帰省から四年になるだろう。

仕事が忙しかつたという理由もあるのだけど。特に用もなかつたし、放任主義だった両親も何も言つてこなかつた。

でも、今回は、わざわざ有給をとつてもこなければならない理由があつた。

車窓の景色が流れていく。

前のほうから高校が見えてくる。

太陽の熱気で空気が歪み、校舎が揺らいで見える。久しぶりに見る母校だ。

夏休みの真っ最中で、汗と砂埃にまみれながらグラウンドを駆け回る後輩達がいる。

当時、バスケ部に在籍していた私も、夏休みは毎日学校に通い、

死ぬほど汗を流したものだ。

懐かしい

車内アナウンスが停車を告げる。

気が付けば、荷物を手に立ち上がっていた。

電車を降り、むわつとした熱気に顔をしかめる。クーラーに慣れた身には厳しい暑さだ。

自動改札などという洒落た物はまだない。駅員さんが健気に切符を確認していた。乗客は涼しい車内でのうのうとしているのに、この炎天下の中で立ちっ放しの業務。本当に頭が下がる。

こんな小さな駅などさつさと自動化して無人駅にしてしまえばいいんじゃないかとつくづく思う。

改札を抜け、外に出る。

そこにあるのは、変わらない風景だった。

部活の帰りにみんなで食べに行つたラーメン屋。外装はところどころ塗り替えられ、修繕の跡がみえるが、のれんの名前は変わっていない。

電車が来る時間まで暇を潰した本屋。立ち読み防止用のビニールが無いのが有名で、開けっ放しの入り口からは何人かの学生服が見える。

ふと、思い出した。

そこそこ活気がある駅前から、住宅地帯のほうへ続く小道へと入る。そこにあるのは小さな公園。

申し訳程度の遊具と一つきりのベンチ、街灯が一本。いかにも、余った土地を申し訳程度に加工しましたという風情だ。

手入れもろくにされていないようで、ところどころ雑草が目立ち、プランコや、ジャングルジムのベンキは剥げ、赤錆が浮いていた。ベンチに腰を下ろす。木目がむき出しで、よく言えば味がある。

悪く言えば古臭い。

どうして忘れていたのだろうか、あの頃のわたしの事を思えば考
えられない。

わたしは、思い出してしまった。

の人とよくここで話をした。練習の愚痴、先生の悪口。進路の
こと、受験のこと。

時間が過ぎるのを忘れて、帰りが遅くなり、両親に怒られたこと
もあつたつけ。

わたしの脳裏をよぎる、たくさんの思い出
それと、ただ一つ残してしまった忘れ物。

取りに行かなきゃいけない。

わたしは、六年ぶりの通学路を歩き始める。

わたしは滝のような汗をかきながら六年ぶりに校門をくぐった。久しぶりの高校だ。何もかもが過去のままで、時間が止まつたような錯覚を覚える。

生徒用の下駄箱を横目に見ながら来客用の入り口へと向かつた。ガラス戸を開け、据え付けてあるノートに記入する。氏名、それから来校理由。

わたしはすこし考え「元・生徒」と記入した。理由とは違う気がするけれど、大丈夫だろう。

そう、元・生徒だ。ここには時の流れなんて無いのに、わたしの時間だけ進んでしまつた。そんな気がした。

上履きでなく、来客用のスリッパを履き、校舎の中へと入つた。ぱたぱたと、わたしの歩く音が響く。校舎の中は静寂そのものだつた。

誰もいない校舎をぶらぶらと歩く。なんだか現実味が無い。あの頃と同じに学校があつて、わたしが居る。しかし、そのほかのものは何も無い。不思議な感じがする。

暑い中、駅から歩き通しだ。喉が渴いた。

水飲み場にたどり着く。上向きになつている蛇口を一度下向きに直してから、上向きにし、栓を捻る。

水が流れ落ち、シンクに跳ねた。

あふれでる水面に口をつける。割と冷たくておいしい。

長距離走のあと、部活の休憩。学校に通う誰もがこうやって水を飲む。だけど、それはすごく狭い常識だ。水道水を直接飲むなんて普通はしない。飲み物を飲むときはペットボトルか、コップを使うだろう。

びちびち

どこかで水の跳ねる音がした。わたしの蛇口ではない。水の滴る

口元を拳でぬぐい、顔を上げた。

十メートル程離れた水のみ場、ワイシャツ姿の男が上着に飛沫が飛ぶのもかまわずに顔を洗っていた。

袖を二の腕までまくりあげ、胸元はだらしなく広げられていた。教師のようだ。自分と同じか若干年上に見える。新任か勤めて数年といったところか。古参の教師であれば、元・生徒である自分を知っているであろうし、昔話もできるが、新任では、お互いのことなど知っているはずも……、いや、違う、わたしはこの人を知っている。

「セン……パイ？」

あの頃より痩せ、髪も伸びていたが、面影があつた。細かな仕草にも見覚えがある。そういうえば、部活の合間に、トレーニングウェアやユニフォームが濡れるのも気にせず、あんなふうに水をかぶっていたっけ。

白地の服に透けて見える胸筋や鎖骨を、いけないと思いながらもチラ見していたのは人には言えないわたしの秘密。まあ、あれだ。一方的な片思いつて奴だ。

振り返った彼はわたしを視界に認め、「よ、久しぶり」と手を上げ、くつなく笑った。

わたしの心臓が密かにドクンと音を立てた。

扇風機の風がわたしの頬を撫でる。

数学準備室という名の教師のたまり場にいるのは、わたしとセンパイの二人きりだった。

わたしは来客用のソファーに座り、センパイがコップにアイスコーヒーを注ぐのを眺めていた。

「砂糖とミルクは置いて無いんだ。悪い」

彼がソファー・セットのテーブルにコップを二つ並べ、わたしの向かい側に座った。

「大丈夫ですよ。ブラック、飲めるよ！」になりましたから」「そうなん？」

からかうような口調。わたしは『これが証拠だ』とばかり一口飲んでみせる。ちょっと苦い。

「先生になられたんですね、なんだか、納得できるというか、意外とこうか……」

部活中、もつとも先生に反抗していたのはセンパイだった。これが「意外」の意味。

また、わたしを含む後輩に親身になってくれたのもセンパイだった。これは「納得」の意味。

「ま、先生つていつも、まだ一年契約の講師。まだまだこれからつて所。お前の方は今なにしてる？」

「ん、一流企業の広報部ですよ。普通に〇ーします」

「そつか、月日の経つのは早いもんだ」

センパイもコーヒーを一口すすった。

「そういえば、他の先生はどうしたんですか？」

「ああ、本当は、今日、学校休みなんだ。俺は居残り」「居残りって？」

「進路に悩んでいる生徒がいて、。そいつのためにパソコンで資料

あさつてたんだよ。別に担任って訳じゃないからやらなくてもいいんだけど

「センパイ、変わりませんね」

「いや、もう立派なオッサンだろ?」

「彼から自嘲の笑みが漏れる。

「そんなんじやなくて。ほら、部活が終わった後、よくつきあってくれたじやないです。シユーティングとか」

「そういや、そんなこともやつてたな。毎日、毎日、一人で居残りしてたっけか」

「そうだ! バスケ部の部室、行ってみませんか?」

部室といつても用具置き場にテーブルと椅子があるだけのほとんど倉庫みたいなものだ。別に私物が置いてあるわけではないから鍵なんか掛かってないはずだし、体育用具室としても使われていたはず、特に問題はないはずだ。

「そうだな。実はおれも卒業してから見に行つてないんだよ。バスケ部の顧問でも、体育教師でもないから、なんか行きづらくて」

「じゃ、ちょうどいいですね。行きましょう」

わたしは手元のコーヒーを飲み干し、席を立つた。

ギギイ

たてつけが悪いドアが音を立てて開いた。

思わず声が漏れる。

汗の臭い、埃の臭い。

カビの臭いも少しは混じっているかもしれない。

よくこんなところで喋ったり、御飯を食べたり出来たものだ。

一年生のとき、磨かれたバスケットボール。あの頃と変わらない。今も、新入部員が一生懸命磨いているんだろう。

壁に立てかけてあるエアマットはよく昼寝につかったのを覚えて

いる。昼休みや、部活の後に数人で寝つ転がった埃臭かつたけど寝心地は良かつた。

ここは、わたしの『青春』ってヤツが集まっている場所。

そして、ここへ来ることが今日の目的だつた。

センパイが今、私の隣にいるというのも、なんだかおかしな神様の思惑を感じる。

彼を見た。物置棚からキャプテンのナンバーである4番のビブスを引っ張り出し、感慨深く見つめていた。

視線を外し、部室の真ん中に陣取るテーブルに目を向ける。

傷の付き方、色のはげ方。

消えないようにカッターで彫られたラクガキ。

覚えている。

あの頃と同じテーブルだ。

わたしはその場に屈み、下を覗き込む。

「あつた……」

セロハンテープで、裏板に張りとめられているのは、一通の手紙。手を伸ばし、テープを剥がす。時を経て、黄ばんでパリパリになつていて、粘着力も弱つてから、簡単に取れた。健気にも今までよく張り付いてくれた。ちょっとだけ、セロハンテープに感謝。

謝。

文具店で小一時間迷つて買った封筒。元は上品で大人っぽい茶褐色だったはずが、すっかり色褪せ、乾燥でガサガサになって見る影もなかつた。

裏に書いてあるのは差出人のわたしの名前。表に書いてあるのは宛先のセンパイの名前。

それは、過ぎ去つた日々の残り香。

「それ、なに？」

センパイがこちらを見ていた。自分の名前が書いてあるのが不思議そだ。

わたしは答えた。

「ただの、ラブレターですよ」

「ラブ……レター？」

「そうです。面と向かって言つ勇気は無かつたし。あの頃は携帯なんてなかつたから、古典的かなつて思いながら、一晩かけて頑張つて書いたんですよ」

わたしの声はさつきまでと変わらない。センパイはそんなわたしをじつと見つめている。

「書いたまではよかつたんですけど、決心がつかなくて、いつか渡すために部室に隠していたんです」

センパイは何も喋らなかつた。

「今日はコレを取りに来たんです。センパイがここに居たのは丁度良かつた。六年越しのラブレター受け取つてください。」

わたしはセンパイにその封筒をゆっくりと差し出した。あの頃のわたしだつたら、恥ずかしくでこんなこと出来なかつただろう。

センパイは、何も言わず、受け取つてくれた。

「中身はわたしのいないところで読んでくださいね。恥ずかしいから」

沈黙を守つていたセンパイの口がゆつくつと、ためらいがちに開かれる。

「俺、実は、おまえのことが……」

センパイは言葉を失つた。わたしが人差し指でセンパイの唇をふさいだからだ。

実は両想いなんぢやないか、なんとなくそんな気はしていた。でも、あの頃は思い切りがたりなかつた。

「ストップです。センパイ。そこから先は言わないでください」わたしは彼に背中を向け、窓を見た。日が暮れかけている。橙の光が部室を照らしていた。

あの頃も練習が終わつた後、この光のなかで、こんな風にセンパ

イと話をしていた。

でも時間は流れ、わたしは変わってしまった。

「ごめんなさい。そういうつもりで渡したんじゃないんです。ただ、あの頃の気持ちに決まりをつけたかったから……」

もつたいなかつたな。あの頃、今みたいにできたらよかつたのに

自分の中では、全部終わつたつもりだけれど、そう思つてしまつた。

わたしは、背を向けたまま、つぶやくように言つた。

「わたし、結婚するんです」

「そうか……相手は？」

しばらくの沈黙の後、彼は口を開いた

「センパイの知らない人です。優しい人ですよ。もう、式場とか日取りとかも決まっています」

「そう」

わたしは背中を向けたままだ。センパイの顔を見ることはできない。そして、わたしの顔もセンパイに見られることはない。

別に、結婚相手に不満は無いけれど。でも、あの頃、ちゃんと渡せていたら。また別の「今」があつたのかもしれない。

「いろいろ、変わつたし、これからも変わっていくんだな」

センパイがつぶやくように言つた。

どこか遠くでカラスの鳴き声が聞こえる。

憎らしいほどに、学校というのは変わらない。人だけが時の流れに流されていく。

しようがないんだ。と、自分に言い聞かせた。

足元にしまい忘れたバスケットボールが一つ、所在無げに転がつ

ている。なんとなく、両手で拾い上げる。

手元の感覚からおそらく女子用の六号だらう。何年もボールに触つていないとこりのに、表面の「△」はまるで指に吸い付くようく馴染んだ。

「センパイっ！」

わたしは、ボールを抱き、思い切つて振り返った。

「あのときみたいに、シューティング、やりませんか？」

このままこんな雰囲氣で別れるのは嫌だ。わざとらしくでもい

いから、何とかしよう

そんなつもりで明るく言つたつもりだったが、成功していたかどうかはよくわからない。

「ああ、やううか」

センパイもボール入れから男子用の7号ボールを取り出していた。

一人ならんでフリースローラインに立つ。言い出したわたしが先だ。
何度かバウンドさせてボールの感触を確かめ、ショートの姿勢を
とる。ボールが手に吸い付くような感覚を覚える。

自然に力が抜けた。何度も何度も練習した動作。

構えたボールの向こうに見えるゴールを見つめ、放つた。

身体が自然に動き、肘の動きに合わせ、ボールが両手を離れる。
ぼしゅつ

ボールは真っ直ぐにネットを掛け、真ん中を射抜いた。
「うしつ

思わずガツッポーズをとるわたし。やつぱり、入れば嬉しい。小
走りでボールを拾いにいく。

センパイも放つ。綺麗なフォーム。

寸分たがわす、ネットの中心へと吸い込まれる。

「やりますね、センパイ」

「ふふん、お前もな」

お互い、口元に不適な笑みを作る。
ぼしゅつ

「お？ わたしもまだいけるんじゃない」
「おれだって、まだまだ若い」

がだんつ

「ダメダメじゃないですか」

「う、うるさい、今のは手が滑ったんだ。もう一回やらせや、もう
一回」

一人で、話をしながら、何度もシューートを繰り返す。身体で覚え
たものはそう簡単には忘れない。

全ては変わっていく。それでも、変わらないものだって、一つや
一つくらいはあってもいい。

「ねえ、センパイ」

「なんだ？」

「今度、内履きもつてくるんで、10月1やりましょう」

「おう、いいじゃん。やろうか。ついでに、その後、飲みにでもいこうな。いい店知つてんだ」

「いいですね。わたし、これでも結構飲めるんですよ」

「何言つてんだ、おれだつて大学のときはビールを両手に持つて…」

…

体育館に響くボールの音が二つ。

夕日の中に踊る影が一つ。

これはこれで、いい。そう思った。

夕焼けが茜色に燃えている。

センパイと二人、通学路を歩く。

「ねえ、センパイ。あの公園覚えてます?」

「ああ、あのボロい公園だろ?」

「せめて『風情がある』とか言いましょうよ」

私達の足は高校生の時と同じようにその公園へと向かっていた。駅から、小道へ一本入る。

しかし、公園の入り口で一人揃つて立ち止まることになった。

唯一つのベンチ、そこには既に制服姿の男女が座っていたからだ。センパイを見る。やれやれと、苦笑いをしていた。

「先輩らしく、後輩に譲つてやるかな」

「そうですね」

幸い向こうはこちらに気づいていないようだ。見つからないうちにつっこみにこつそりと退散する。

「いやいや、若いつてい�ですね」

「ばーか、何言つてんだ。おれ達もまだまだ若い」

「まあ、やつこり」とこにじしましちょうか

暮れる夕日、どこからか現れる制服の群れ。何年前かのわたし達。

「センパイ、送っていただいてありがとうございます」

改札の前で立ち止まる。

「いや、別に、せっかくだから、もうちょっとと話したかったし」

「それじゃ、また。今度、ホントに一〇〇一やりましょうね」

背中を向け、改札へ向かう。

「あ、ちょっと待つて！」

わたしは、もう一度センパイの方を向いた。

センパイは、わたしに微笑み、言った。

「結婚、おめでとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217k/>

わすれもの

2010年10月22日00時19分発行